

善色物類編



初編

下

^ 13
2901
3



合

13
2901
3

春色梅美婦祿卷之三

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第五回

這より暫付春水が老は女ゆゑそつづる異見ぞと案
車馬の相を候月を児女達へ教刻さるとゆゆゑ
例の人情本の換くせうらび古き尊厳をまほし
まかどろし再花彼尼ハ密次帝ふ向ひの言を
國ぐるし言だもぐるし思はんが一樹の蔭の宿

昭和九年
七月五日
珠求

他生の縁と因はまづゆへて冥解する人こそ
身の上の初ま付ふ父の別且母と兄とふ養ひ世の
便するく信業せし申すやましく身まうりし
ののちのちよき年も思ひ及人酒とまて飲る
のこ勝負の常の所なり一人ある妹もま
思ひ及まの徳秋夜なるけの十二の年
廊の婿家のまきまづりし人の子はま
よう苦勞せしね他家の娘の花のま月少の

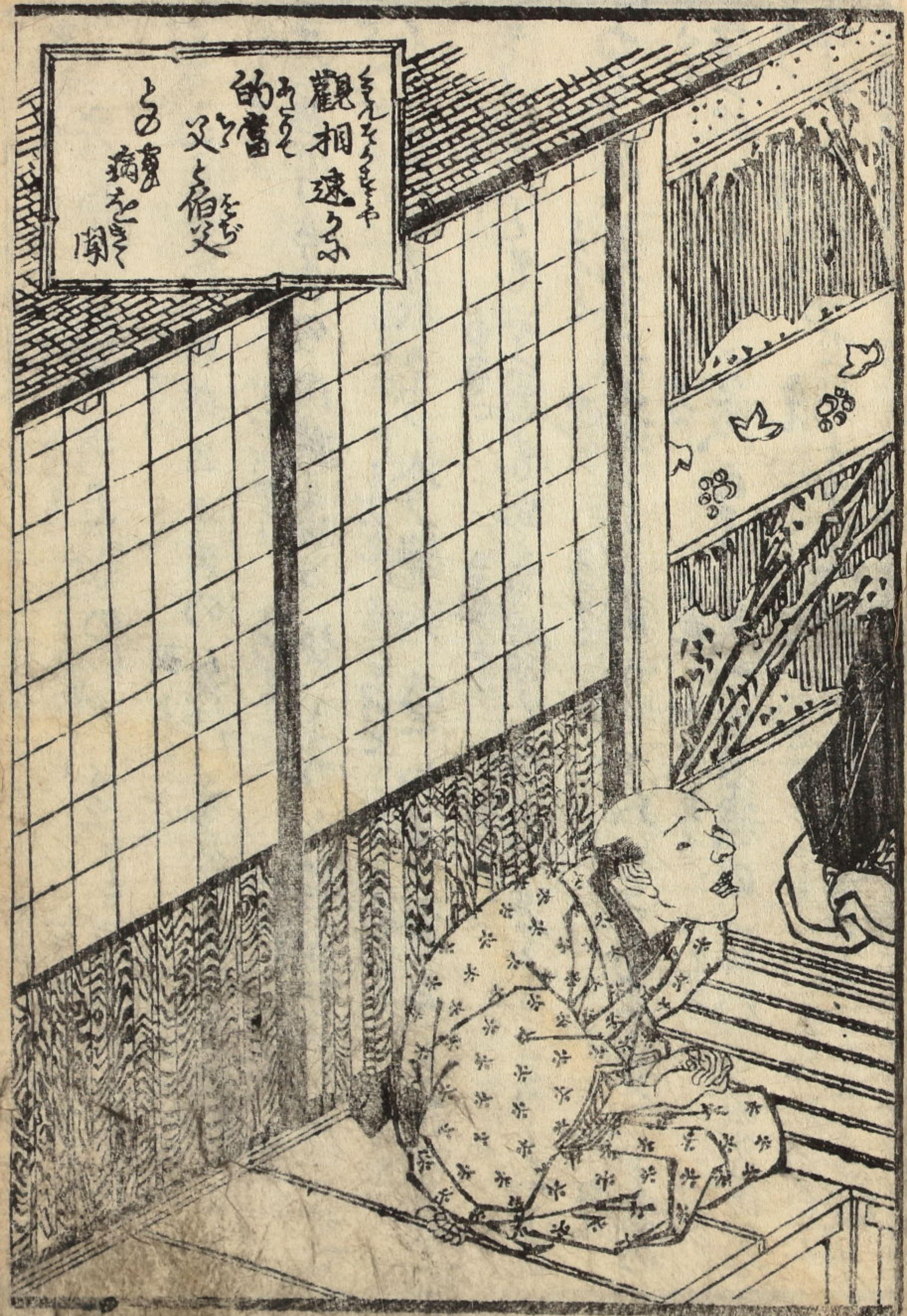
美しき人相をよく観てあまを
瀬のまもま候ては月と見ら
長髪を置てさる勤の身ま
あまの常致すの教と客人の
を申し人相をよく観てあまを
まを相まののを信初め
身で後を流の表債の身の
秋月で見事見改ても自然

備人我まらうはらうを觀るやてりまらう捨つるも多
用家一生佳と浮草の夢を言わたて用家世流の
相と情うーよりぬいし仲あも終つて一まをさうし
情もま人をせらるる念をばらばら遠の雲のたぐひ一
他人の業にもあそびて暇日と暮し今日と暮らふ
免角肩書書のらつらう一ま變化能知くも老い
けるうると縁き一まはるをまき今も我身の上と清も
最極う一ま苦界の年の暇を捨てまらうよりあはれ

姿をけりて改てあも清く一縁と頼ひ一思ふを捨て
衣を厚薄ゆるゆる浮世の音とあま止むらぬ氣も安く一
不佞の安樂を我身の一代とあきらむらう人相をせら
身の徳初より糸の得ふ一て中身相を觀るのをあぬ
まらう一生佳及ぶる頼ひの心をくまらうけらるるこ
氣を起す一安堵するけらるるまらうまらぬまらぬ
陰陽のたぐひの牛利をせらるる一ひまらぬ一まらぬ
苦ふせぬ今の悦ばしきまらぬも年のたぐひ存せらるる

種々の苦と樂が、仕度しても、在るんが、心を清く、
養ふる、
味、
申れ、
養、
さ、
さ、
さ、
例の親、
峯、

算、
さん、
伯、
世、
の、
屋、
方、



峯へさき見 佐藤く 何の 内相ぶの 去へ 十五 内相とやまのぞ
ぶつおまむね 内母さぬの 著作 まけくま 今ね程う
大具塚さぬの 内持病が 例ようう 何かお悪ひ極まで
を内産まけくま 今晩ハ 空お見 兼まら おおまら
まーまともそそ君も おれお驚く 明日でもよろしおま
おまら 多分お書下 成就でござん ぶつおまむねの
為におおむせ 成就 多分まお青森の 目おさぬの 何
中で 内相もでござん 又お口選 尚ごい事でござん 紙が

まのまら トのまを 信と 思ひあらる 尼のおいふ
合のおいせ 宿裏まて めまきーが 峯まら 人からまま
今月入今つら 爺先の 口と茶お びらとあのみで 居ら
あごまら 内及みおら おおまら 淋くらら びが 狂言
とーて おおまら 又とも 淋くく 行るおまら ねと
同作の本宅へ おおら 一と おまら ぐんや お勝の家の おま
まんと 探ひまら 淋くく ぶつおまむね 何かお悪ひ極まで
まら 何かお悪ひ極まで 淋くく ぶつおまむね 何かお悪ひ極まで

三交も海の入りのくちまを運入るなり分け見守りて先
晴も強き一の若元當世の流りなり海は海に盡る也
とくはらばや流る人橋本でも讀くも人々も又我
りの海もるも海人なり自然世なら通運一のゆあ
た信実の人情とくわさりのまをあののまのま
む海くあののまをあののまのまのまのまのまのま
精中一わくの男が相愛の恋をして保養をい
彼よるまがうまの者をも人橋よわたるの好男と

貴いべー一五判か世はく魚不しくおるが惚るまのまを
再魚まらむら巻次第がゆて行くまをぬれむむい
うらへ海家の娘お報と孫お娘女まがうまのまのま
今もお柔どんせありがまのまのまのまのまのまのま
老女まさんがおらう母人まんの所へぬらまをま
まへ一も偏屋をくわ知でまのまのまのまのまのま
まごもあまの心しつるがまのまのまのまのまのま
家の伯母まんでお柔まのまのまのまのまのまのま

らんを田舎より育つてお嬢ごころの一人もあつた
せんヨ移らんぞと給金ツ児の類よごころの類もあつた
ト平体もあつたのさりの仲にもあつたの目も要入あつた
澤ちがうふ園そのの淋しきものあつた

尾ようお京ググの律 春の律 父の律 春の律
續けて流す道は入解りかたうら
まの例の人情卒の着官の鳥屋をさすをやる格
るべまのりさあさひ夜のはらあまのまのま入

郷者あつたのさあつた格つてあつたの父とあつたの
後へ後へあつた着せまをせん

第六回

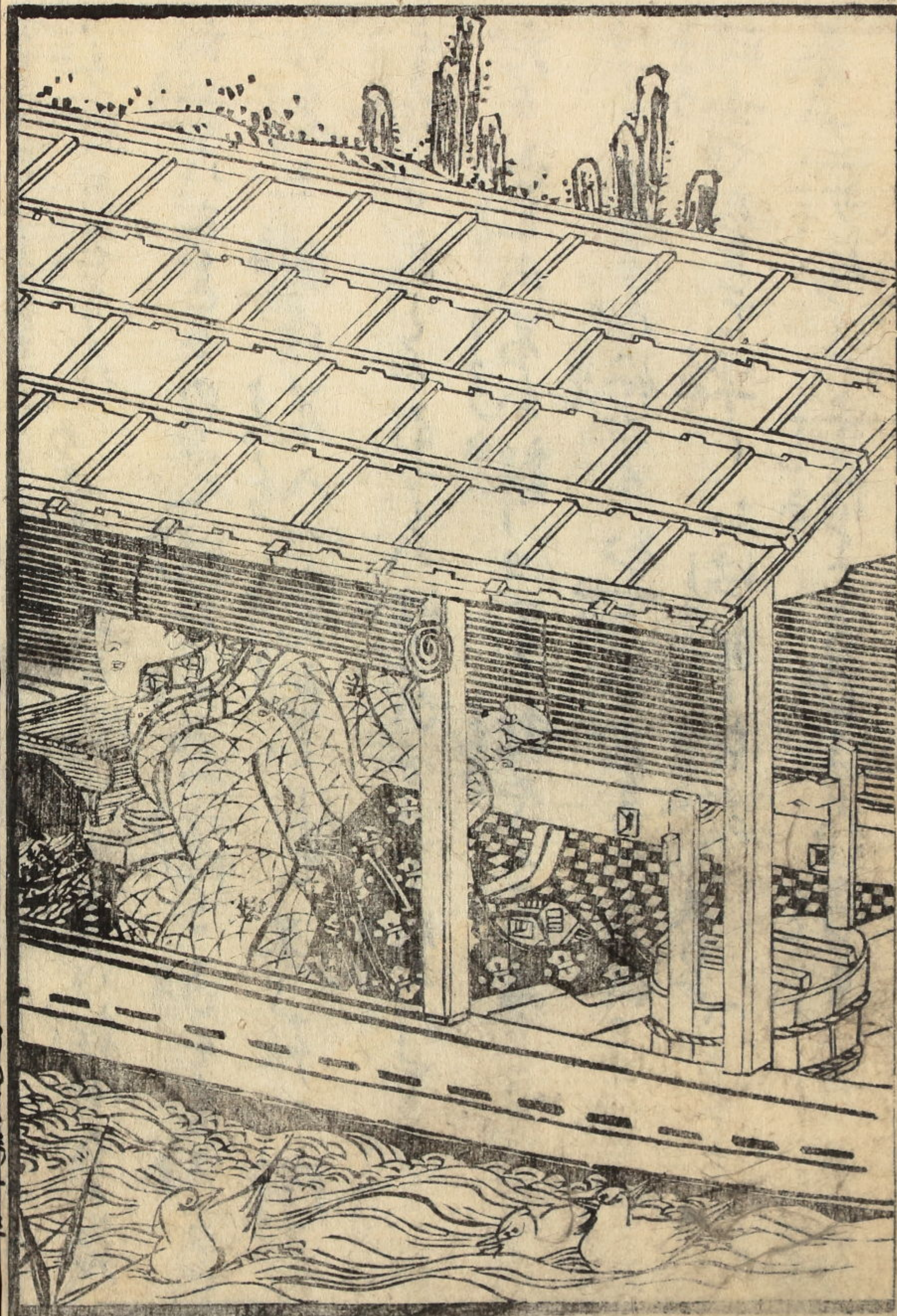
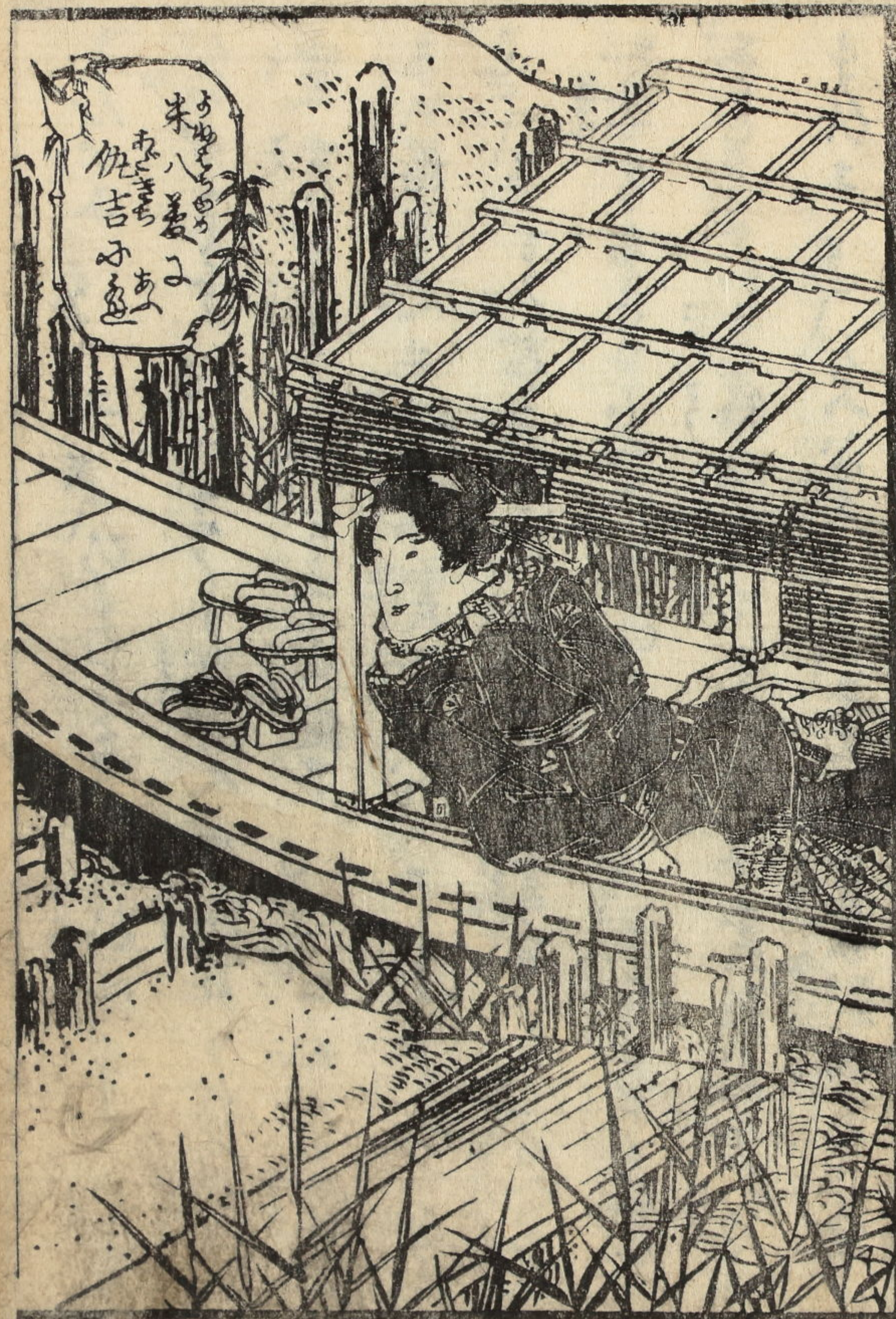
梅の花折るあつたせん 我知ふ白ひの格をさす
せんトあつた法師の格をけん 実の格を惜む格を
まの格をけん 左の格をけん 梅の格をけん 園の格を
よりしとあつたの目数をあつた格をけん 梅の格をけん
あつたをさす 風格の格人又あつた花の目と格をけん

梅乃を樂しむ舟の甲 海濱の杉岡の遠路を好む
あまぐし 舟の甲 海濱の杉岡の遠路を好む
新しき花を身ぬまぐし 百花園も早業立て 新梅
やーとん入言ぬぞ 流行の体はあつて 人と喜入得る春の
梅文好むてふ 書人の海さへあつて 舟の甲も田舎の
祿もあつて 舟の甲の 名所あつて 浮名も湯田川の
甲斐文あつて けしき 都鳥もあつて 舟の甲も
舟の甲もあつて 舟の甲の 舟の甲もあつて 舟の甲もあつて

雁木の人控の梅見舟堤の上より 梅橋へしる 両
個の舟の梅の姿類はまき 暖ぬ梅の月元丸の
画一美人に傍りて 男女あまの 船の甲もあつて
梅文を押しよる 舟の甲もあつて 舟の甲もあつて
愚ひて 苦みひくと 羨ひまぐし 舟の甲もあつて
新梅香あり 舟の甲もあつて 舟の甲もあつて
舟の甲もあつて 舟の甲もあつて 舟の甲もあつて
くーとん入言ぬぞ 流行の体はあつて 人と喜入得る春の

今^{いま}米^{こめ}八^{はち}舟^{ふね}の表^{おもて}にまて居^ゐて 米^{こめ}一^{いち}舟^{ふね}おきて人^{ひと}一^{いち}
何^{なに}を^をお^おりてお^おきま^まするが^がらあ^あれ^れも^も程^{ほど}多^{おほく}く^く舟^{ふね}へ^へ這^は入^いる^る
頭^{かぶ}の^の定^{さだ}松^{まつ}越^こぬ^ぬ體^{たい}の^の方^{かた}へ^へ行^ゆき^き持^もち^ちて^て並^{なら}び^び舟^{ふね}と^と小^こ
舟^{ふね}の^の中^{なか}を^をと^とり^りて^てお^おき^きま^ます^す一^{いち}人^{ひと}の^の家^{いえ}根^ねの^の内^{うち}へ^へ入^いり^り米^{こめ}
さん^{さん}何^{なに}を^をお^おき^きま^ます^す肝^{かん}腹^{ふく}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
の^のお^おき^きま^ます^すを^をま^ます^す出^でる^る二^{ふた}人^{にん}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
分^{ぶん}を^をさ^さう^う米^{こめ}一^{いち}ア^アイ^イあ^あら^らう^うと^とヨ^ヨ何^{なに}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
確^{たし}そ^そく^く行^ゆき^きま^ます^すヨ^ヨ何^{なに}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ

ノ^のウ^ウ柳^{りゅう}那^なを^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
お^おき^きま^ます^すの^のど^ども^もお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
の^の一^{いち}ト^ト同^{どう}が^が米^{こめ}八^{はち}の^の完^{かん}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
を^をお^おき^きま^ます^すあ^あら^らう^うが^があ^あら^らう^うは^はる^るひ^ひが^がま^まト^ト笑^{わら}ひ^ひで^で居^ゐる^る一^{いち}
だ^だら^ら 寬^{かん}の^の足^{あし}が^が解^とけ^けヨ^ヨモ^モお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
み^みヨ^ヨウ^ウ米^{こめ}さん^{さん}何^{なに}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
兩^{りやう}女^{にょ}で^でお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ
米^{こめ}一^{いち}ア^アサ^サ何^{なに}を^をお^おき^きま^ます^す一^{いち}を^を成^{なり}す^す後^{あと}も^も元^{もと}く^くえ



きん ぎん ぎん
 まねま ぬい ぬい ぬい
 下本に立て居て居て見くらばみ 形の不付に丹さんみ
 物束とて 後うら 来て 世のこころも ちくらけと
 思ひのうら 出来とも ちうしと せよとおりの分て
 然言うこのサ 左様うまへ ちうしとて 人び係
 何様も 実いふまゝ ちうしとて 米一ツ ちうしとて ちうしとて
 袋くらう 海ひねり ちうしとて ちうしとて ちうしとて
 海ひ痛ふ 米一 ちうしとて ちうしとて ちうしとて ちうしとて

きん ぎん ぎん
 まねま ぬい ぬい ぬい
 下本に立て居て居て見くらばみ 形の不付に丹さんみ
 物束とて 後うら 来て 世のこころも ちくらけと
 思ひのうら 出来とも ちうしと せよとおりの分て
 然言うこのサ 左様うまへ ちうしとて 人び係
 何様も 実いふまゝ ちうしとて 米一ツ ちうしとて ちうしとて
 袋くらう 海ひねり ちうしとて ちうしとて ちうしとて
 海ひ痛ふ 米一 ちうしとて ちうしとて ちうしとて ちうしとて

中 米一丁^{よま} 能^まお糸のま^かくらみ^あ 糸^お入^まへ^ま
私^まきやア遠^{えん}ざ^こヨト^りり^ある^う 糸^あの^かま^かの^ま
ま^えの^ま金^{えん}平^{へい}輝^きの^まま^まの^まま^まの^まま^まの^ま
振^ふり^ま 糸^{いと}を^まま^まふ^まる^ま 両^{りやう}女^{にょ}の^ま美人^{びやうじん}の^ま眩^{くら}
し^ま着^ま着^ま官^{くわん}の^まま^まの^まま^ま梅^{うめ}曆^{れき}の^ま辰^{たつみ}巳^み
の^ま圓^{えん}の^ま形^{かたち}の^ま風^{ふう}情^{じやう}の^まま^まの^ま何^{なに}の^ま巻^{まき}と
換^かく^まく^ま 命^{いのち}の^まま^まの^ま迷^{まよ}ひ^まの^まま^まの^まま^まの^ま
條^{じやう}下^げ知^ち換^かひ^まの^ま知^ち人^{ひと}の^ま

